

一切は夢である

—まま・ぶりや・かんやあや—

私の胸の奥の奥では

かんでらが燃えてゐた

夜は暗いし、流れは無音し

愛しい舟が引つばるまゝに

ねろ ねろ と私の影は融う、融う

現象と現象は結縁した

「ね、ね、この世から四哩離れたところへ往かう！」

女は吐息した

私の胸に星がこぼれた

ああ ああ ああ……思ひ切つて

去なうぞ、去なうぞ

一切は夢である

私は「幸福の窓」へ吹き矢を放つた！

竹 杖

——To my Beloved "Sick"——

わたしは二十三の節ふしを數へる

愛杖は二十三の年を保つから

夏でも冬でも春でも秋でも

愛杖はわたしに従ふのです

いつ迄も、愛する情は變はりません

いつ迄も、愛する杖は變はりません

愛杖の始めつからのその素直さは

愛嬢のわたし丈しるしにゆるす證しるし徴しるしです

竹杖よ どんなにそのことが喜びであるか

竹嬢よ どんなにそれが吾身にうれしいか

あなたは何處までもわたしに従ふ

わたしはどこへでもあなたに随ふ

悲しくて侘しくて

躓いては悔んでも

わたしは決して孤獨ではありません
わたしの散歩はいつも楽しいのです。

死のべごにや

——To the Memory of N.S.——

あの小さなかふえの

あの薄暗い部屋

あのつめたい、小さな卓^{てえはる}で

君は可憐なべごにやを見た

あらしの前の

踏みにじられる前の

淋しさに脅えて、その來歴も語らぬ

かなしい小さな花を君は見た

(へごにや！ へごにや！)

へごにや！ へごにや！

わが戀の如くまた命の如く

そは取りのこされし一つの思ひ

ああ ふるき日の

遠き願望よ

あの切ない、薄命の卓てんぷるで

非業の花は

その時頂垂れてゐた

小さなへごにやは泣いてゐた

へごにや！ へごにや！

たゞの一度でいゝから、にこと笑つておくれ

沈倫の……否、それでも思ひ切つて眞紅に咲いた運命の花にまで

君は、君は、その時わが囁きを注いだとか……

思へば——かなしい貌も大地に落ちた

そうして遷流の水を掬んだ不幸な君も

今は、吁——いまはもうゐない

けれども傷み勝ちな私の魂は

あの妙に明るく沈んだ日の来る毎に

孤獨な異國で、醍醐味の如な君の純情を味ふのだ。

宵の散歩

火の見櫓の上で月が燃えてゐる
 眠り街から 番人が急いで駆け登つた
 ヌリバンがあらちらこちらへびつこに飛ぶ……
 「いゝなア……世の中は！ 淋しいけれど
 この世を離れてどこへ往く氣にもなれないよ」
 泣きたいような黄昏の街を歩いてゐる時
 深い霧の中でちかちかまつた私の心の中へ
 と斯う、呟いて寄こしたのは誰だ！……

寒夜

凄い月の夜に女はかよつた
 満願の秘夜に私はみつけた
 梵鐘がしくしく泣いたその夜に
 樓に匿れる 月月……
 蒼ざめた霧が取り巻く
 封印された心臓を奪りたいばかりに
 それから毎夜
 私は破芭蕉の如に不開のどあを叩いてゐる。

雨

びしよびしよと雨が降つてゐる
私は部屋に居堪らなくなつた

挨りだらけの樂器を取り出して掻き鳴らしてみただけだ

鳴らしても鳴らしても、夫れは私の汚れた聲よりも悪く響くもの

ぶつりぶつり古い絃は切れてしまひ

ああ 泌々と火鉢の欲しい時候だ！

腐れ月

あれは魂を失つた

月だよ！ と私のつれは申した

腐つて尙も生きてゐる

月の塊をフと指した——その時に

營門の前では番兵が

銃劍をピカリと突出した

夜十二時過ぎの街

そして寂ひっそりとした

向側の酒場を睨んでゐた——

ああ 通れはしないしやないか

あれが

あいつが

あの忌々しい月奴が

——腐肉の如に

今にもべつとり落ちてきそう

ああ 歩けはしないじやないか

躬を鞠めて

目を閉つて

夢我夢中で抜け切らう

何處でも、何處でもいゝ……

寂 滅 偈

ヤケクツに突つ立つ

煙突とバラツクの間に墜ちる

夏の入日は

大きいぞ！

煤煙と騒ぎとドブの匂ひに目を圓くした

私のちつちやな魂は

どこへどうフツ飛んで往つて了つたのか

皆目知れない

熱い夕

俺は

塵芥棄て場からムツクリと弾ね起きて

眞紅に焦げた空を見上げた

焼け砂原！

きたない感情を叩きつけてやれ

人間の呪ひを、生き物のかなしい怨訴を、ぶつつけてやれ

濤音も死んで了つた

黄色い海から

潮風よ

潮風よ

勇ましい明日を孕んでやつて来い

傷める街路をつたつて、静かに憤るボロ橋を渡つて

俺は

半神勇士のなれのはては

乞食王クロバンのやうに

空に泣く

——無一物、無一物、無一物……

ああ 今日^{あした}は凶日狂氣の明日よ

俺の住む日は……どこですか……。

失へる艇

太東岬の鬼と化り損ねて

私はアンノンと憊うして生きてゐる

けれ共、塗布艇よ

私に乗せた愛しい端艇よ

汝は何處へ往つた

何處へ去つて了つたのだ

いたづら者の退潮は

するずると吾等を引きずり落した

浪漫的な情奔的な岸邊から

何もかも、そして一切を簞奪された

ふたりは従順に

え見えぬ力に托生した

怖ろしい嫉妬の巨濤が

恰も怪魔の激怒の如に

ガブリと吾等を呑んだ時

くるくると私の軀に巻き附いて離れなかつた

悲戀の紀念の一本の帯は

ふたゝび斯うして戻つてきたが

汝はあの龍巻に掙はれたのか
如何にも深く

それとも汝は暗い秘密の海底へ沈んだのか

しなびたズツクの片靴の如に

ヘシヤリと波打際に私が叩きつけられた其時には

汝の姿は見えなかつた

ぼーとよ

ぼーとよ

どこへ行つた

何處へ、何處へ汝は往つて了つたのだ！

汝に殉じた私のかなしい身代りは
いま恚うしてこゝへ甦つてきたのに

ぼーとよ、ぼーとよ

わが愛する塗布艇よ

孤獨な沖の鷗の如に還つてくる

汝を、ああ 失へる汝の影を呼んで

太東岬の鼻ツ先で、今も今とて汝の片割れ・俺は
いつ迄も獨り考へに沈むよ。

遍路の秋

また秋になつた
 こほろぎが鳴いてゐる
 たゞ一人なる夜の窓よ
 あの時以來幾年たつたらう
 旅に出て、今夜も
 身一つのこの部屋のまんなか
 両手を枕に仰向けになつて
 窓に忍ぶ虫の音を聴けば

又しても私は在らぬことを考へ：

昨日の人……

逢つては別れた人達の

泣きたいやうな魂魄が

ぐるぐると繞る……

お母さんよ！

老ひの身の安らう暇も無く

月明の窓の側で、このかなしい一人の息子のことを考へながら

しよぼしよぼと鈍り勝ちな目を瞬いておいでですか！

「達者です！」と

申すのも今は力ない

私は黙つて歸りたい

かなしい葛藤の埒内から
 苛々する不定の明日から
 このさみしい人生の遍路から
 何もかも忘れてしまつて、只あなたの側に在りたいために
 私は還りたい
 吁……
 あはれな虫よ
 鳴け鳴け鳴け
 この無燈の窓に寄つて
 今夜も思ひきり哭いておくれ。

贖身の夜

獨逸語の聖書はいぶろを眺める
 私の感情は稍々古典に近い
 長い間留守にした
 ちつぽけな己が部屋に
 ああ 久々で舞ひ戻つてきた
 私は今夜
 何たる静けさを味はうのだらう
 物語よ

六月の濕つた夜は
あだしを 緩除に更けてゆく

海に聞いた悲劇の話を

信仰を失つた一人の青年が

怕ろしい海底で耽つた妄想を

今夜は今夜は語るまい

——何もかも恕しておくれ

机よ、書架よ、七冊の私の詩稿よ

今更に懐かしく私は心を投げる

ああ わが部屋かまへ汝は今夜

何たる寛かさで、何たる優しさで

この私を容れるのだらう

幸福な置燈の蔭から

わがペンよ さらくと走れ

快く悩みをといて

いつ迄も青鐘は沈んでゐるが

もうろうの谷間を渡る

福音の蹄の如に

この静かな部屋にた發てよ

ああ 私は今夜

泌々と只獨り

目立たぬ悦びを開封する。

詩集北方人 定價金貳圓

大正十五年八月五日印刷
大正十五年八月廿日出版

著者 伊藤喬信

發行者 前田隆一
東京市日本橋區元大工町一番地

發行所 紅玉堂書店

東京市日本橋區元大工町一
番地 長野三三六番
長野三三六番

●紅玉堂刊行詩書目●

國木田獨步著
獨步詩集

定價一圓拾錢送費六錢

獨歩は詩人也。其の眞面目は寧ろ詩に於て窺ふべし。明治詩壇先覺に乏しからずと雖、眞にその聲心靈より出て、珠玉の調をなせるものは稀也。獨歩氏の詩醇正素朴、優に傳へて明治詩壇の珍寶となすに足れり。敢て故人を愛慕する諸君に奨む。

若目田三郎譯
ロシアの鐘

定價九十錢送費六錢

今迄の織細華麗な詩は甘い菓子のように、既に我等を飽かしめた。新時代に眼醒めた民衆は、改造世界の曉鐘を亂打する力強い詩を欲してゐる。こゝにロシアの詩がある。一行一句は血に滲み、新生命の熱血に脈うつてゐる。聞け、海の向うから友の絶叫！

勝田香月著
抒情詩集 さびしき人々へ

定價九十五錢送費六錢

さびしく、美しく、はた悲しき一編の抒情詩集。破れたる胸を抱きて生麥の獨居に、しみみと若きものゝ悩みを歌ひ出でたる著者が詩を誦せよ。此の可憐の美しき、さびしき詩集は、必ずや諸君に深刻なる感激を與へるであらう。

517

389

終

